

本心と良心

石門心学実践講座 主催 竹花利明

第一版 2026/02/18

はじめに

「石田梅岩と孟子の性善」において、次のように記述した。

『「仁義礼智の性」を現代人が理解するのは難しい。そもそも「性」という言葉自体が、梅岩の江戸時代においても理解しがたいものであった。ゆえに、梅岩の弟子であり、後に石門心学を広めた手島堵庵は、これを「本心」と言い換えた。

しかし、現代人に「本心」と言えば、これまた理解しがたく、誤解されるであろう。本心は「本当の心」と解されるが、自分自身の「本当の心」は何であるのかでさえ、明確ではない。

結論を言えば「仁義礼智の性」は、「良心」と言い換えるべきである。現代人においても「良心」ならば、自らの心に存在していることを明確に理解できるからである。』

「石田梅岩と孟子の性善」で梅岩の思想として参照したのは、都鄙問答と儉約齐家論の二書のみであり、この2冊に「本心」という言葉は一度も使われていない。これに対して「良心」は、都鄙問答で6回に渡り使用されている。

しかし、「石田先生語録」を紐解いたところ、「本心」と「良心」の使用頻度は逆転していた。

「本心」は、文中16回使用されている。(梅岩の言葉としては、6回のみ)
対して、「良心」は1回のみであった。

都鄙問答で表現されなかった「本心」だが、日常的な対話においては、梅岩も使用していたようである。

「石田梅岩と孟子の性善」では、「本心」に関して何の追求もしていないため、本書をもって補足したい。

辞書における本心と良心

わかりやすいところから始めたい。日本語辞書において、本心と良心はどのように説明されているか。

辞書における良心

【デジタル大辞泉】

善悪・正邪を判断し、正しく行動しようとする心の働き。「良心がとがめる」「良心の呵責かしゃく」

【精選版 日本国語大辞典】

物事の是非・善悪を正直に判断し、状況や利害に左右されずに善いと信じるところに従って行動しようとする気持。人間が生来もっている心とする「孟子」による説、後天的な教育によって育つものとする説などがある。(以下、略)

辞書における本心

【デジタル大辞泉】

- 1 本当の心。真実の気持ち。「本心を打ち明ける」
- 2 本来あるべき正しい心。【良心】。「本心に返る」
- 3 たしかな心。正気。「酔って本心を失う」
- 4 本来の性質。うまれつき。

【精選版 日本国語大辞典】

- ① 本来もっている正しい心。まごころ。【良心】。〔孟子 - 告子・上〕
- ② たしかな心。正気。本性。
- ③ うわべだけでない本当の心。真実の気持。
- ④ 本来の性質。うまれつき。もちまえ。

本心は、このように「4種の意味」を持つため、前後の文脈を理解しないと、どの意味で使用されているのかわからない。その点で、本心は「曖昧な言葉」と言える。

しかし、曖昧ながらも、本心は「良心」の意味も持つ。これは本書にとって重要なキーになる。

なお、都鄙問答における「良心」は、実に一貫している。

使用6回の全てが、「仁義の良心」または「仁義礼智の良心」となっている。

石田先生語録において、梅岩がどのように「本心を語っているのか」を調べる前に、孟子は「本心」をどのように語っているかを明確にしてゆきたい。

孟子における本心

「石田梅岩と孟子の性善」にて、「良心」と「放心」は、孟子が語源であることを述べた。

しかし、調べてみると「本心」もまた、孟子が語源であることが分かった。

良心、放心、本心のいずれも、孟子が語源であり、全てが「告子章句上」で一度のみ使われている。

先に、良心と放心に関して「石田梅岩と孟子の性善」から引用したうえで、「本心」を引用する。

孟子における良心

「良心」は、孟子の「告子章句上 第8章」にある、以下の文が「語源」となっている。

（人が山を伐採し、その結果ハゲ山になったとしても）それが山の【性】であるはずがない。人に存する性も同様で、そこに【仁義の心】がないわけがない。ただ人がその【良心】を放ち失うのは、やはり、斧で牛山の木を伐ってしまうようなものである。

（此豈山之【性】也哉、雖存乎人者、豈無【仁義之心】哉、其、所以放其【良心】者、亦猶斧斤之於木也）

孟子における放心

この「放心」という単語は、「告子章句上 第11章」で、一度のみ使用されている。

「【仁は人の心である。義は人の道である。】その道を捨てて指針もなく、【その心が放れても】求めることを知らないとは、哀しいものだ。人は鶏や犬が放れたら捜し求めるのに、心が放れても探し求めることを知らない。学問の道とは他ならず、その【放心】を求めるのみだ。」

（孟子曰、【仁人心也、義人路也】、舍其路而弗由、【放其心】而不知求、哀哉、人有鶏犬放、則知求之、有放心而不知求、學問之道無他、求其【放心】而已矣。）

孟子における本心

「本心」も良心と同じく、「告子章句上 第8章」にあり、位置は良心が先にある。かなり長い引用になるが、この文全体を読んでこそ、「本心」の意を汲み取れる。

孟子が言った。魚は私の欲しいものである。熊の掌もまた私の欲しいものである。この二つを同時に得ることができないなら、魚を捨てて熊の掌を取る。

命もまた私の欲しいものである。義もまた私の欲しいものである。この二つを同時に得ることができないなら、命を捨てて義を取る。命も欲しいが、命よりもさらに欲しいものがある。だから不正な手段で命を得ようとはしないのである。

死は嫌うものである。しかし、死よりもさらに嫌うものがある。だから災いを避けるためにどんなことでもするわけではないのである。

もし人が、命よりも大切なものはないと思うなら、生きるためにどんな手段でも使うはずである。
もし人が、死よりも嫌なものはないと思うなら、災いを避けるためにどんなことでもするはずである。
しかし、実際には、生きられるのにあえてそうしないことがある。

災いを避けられるのにあえてしないことがある。ゆえに、命よりも大切なものがあり、死よりも嫌うものがあるのである。

これは賢者だけが持つ心ではない。人はみな持っている。ただ賢者はそれを失わないだけである。

一杯の飯と一椀の汁。それを得れば生きられ、得なければ死ぬという場合であっても、大声で怒鳴りつけるようにして与えられれば、道行く者でさえ受け取らない。足で蹴るようにして与えられれば、乞食でさえ恥じて受け取らない。

ところが、万鐘もの高い俸禄になると、礼義をわきまえずに受け取ってしまう。万鐘が私に何の利益を加えるというのか。それは立派な宮室のためであり、妻妾を養うためであり、知人で困っている者に恩を売るためである。

以前は自分の命を守るためであっても受け取らなかった。今は宮室の美しさのために受け取る。
以前は自分の命を守るためであっても受け取らなかった。今は妻妾を養うために受け取る。
以前は自分の命を守るためであっても受け取らなかった。今は知人に恩を売るために受け取る。

これはやめることができるはずではないか。
これを【本心】を失うというのである。

孟子曰、魚我所欲也、熊掌亦我欲所也、二者不可得兼、舍魚而取熊掌者也、生亦我所欲也、義亦我欲所也、二者不可得兼、舍生而取義者也、生亦我所欲、所欲有甚於生者、故不爲苟得也、死亦我所惡、所惡有甚於死者、故患有所不辟也、如使人之所欲莫甚於生、則凡可以得生者何不用也、使人之所惡莫甚於死者、則凡可以辟患者何不爲也、由是則生而有不用也、由是則可以辟患而有不爲也、是故所欲有甚於生者、所惡有甚於死者、非獨賢者有是心也、人皆有之、賢者能勿喪耳、一箪食、一豆羹、得之則生、弗得則死、噓爾而與之、行道之人弗受、蹴爾而與之、乞人不屑也、萬鍾則不辯禮義而受之、萬鍾於我何加焉、爲宮室之美、妻妾之奉、所識窮乏者得我與、鄉爲身死而不受、今爲宮室之美爲之、鄉爲身死而不受、今爲妻妾之奉爲之、鄉爲身死而不受、今爲所識窮乏者得我而爲之、是亦不可以已乎、此之謂失其【本心】。

簡素に表現すれば、「義のためには生を捨てることができ、不義を避けるためには死をも辞さぬ。」と孟子は言い、これを「本心」であると解説しているのである。

良心 = 本心

さて、ここで「放心」を入れたのには、理由がある。
私は「石田梅岩と孟子の性善」で「放心」を次のように解説している。

「学問の道とは他ならず、その『放心』を求めるのみ。」は、
「学問の道とは他ならず、その『見失った【良心】』を求めるのみ。」である。

しかし、学者によっては、これを「良心」とせずに、以下のように「本心」とする場合もある。

「学問の道というのは他でもない。その放ち失った【本心】を探し求めるだけのことである。」と。
フロンティア古典教室：<https://frkoten.jp/2016/02/03/post-895/>

正直、「放心」を「見失った良心」とするも、「放ち失った本心」とするの、孟子の文脈から言えば、何ら間違ったものではない。

ここで孟子における本心と良心の関係性を、以下に列挙したい。

- ① 良心は「放其良心」と表現され、本心は「失其本心」と表現されている。日常においては「放ち失った」状態が、良心であり、本心である。
- ② 前に掲げた孟子の原文から、良心とは「仁義の心」であり、本心とは「義の心」である。
- ③ 精選版 日本国語大辞典の「本心」解説に、「本来もっている正しい心。まごころ。【良心】。〔孟子・告子・上〕」と書かれている。

このような理由から、孟子においては「良心＝本心」とであると、結論付ける。

梅岩における本心

儒学の中で、梅岩が最も重視しているのは「孟子」である。その梅岩が、対話において「本心」を使用しながらも、都鄙問答においては一切使用せず、「良心」のみとしたのも、明確な理由があつたことであろう。

その理由は、やはり「本心」という言葉の持つ曖昧さではないかと、私は思う。

しかしながら、都鄙問答においては一切使用していない「本心」も、石田先生語録の中では、16回使用されている。以降、その詳細を説明する。

石田先生語録とは何か

残念ながら「石田先生語録とは」をネット検索しても、ほぼ何も出てこない。

ゆえに、AIにこれを聞いてみたところ、次のような回答に行き着く。(一部編集)

「石田先生語録は、石門心学の開祖である石田梅岩の日常の言葉や、門人（弟子）たちとの質疑応答を記録した書物。梅岩自身が筆を執って書いた体系的な理論書ではなく、弟子（主に手島堵庵ら）が聞いた言葉をメモ

し、編集したものである点が最大の特徴。」(Gemini)

「石田先生語録とは、石田梅岩の門人たち、とくに手島堵庵系によって編まれた、梅岩の講話・問答・説示を集成した語録集。梅岩没後（1744年以降）、門人たちが講義記録・筆記を編集した」(ChatGPT)

石田先生語録における本心

梅岩が直接語ったであろう「本心」は、以下のように6回のみであり、その他の10回は、梅岩に対する質問や弟子による回答の中にあった。以下の（）内は、章番号。

- ① 【本心】を得ば、その時こそ、主人の恩を贈るのみならず、天下国主の恩をも、一時に贈るべし。(中略) 彼が恩を思ひて、後に【本心】に立ち返らしむるやうにするは、仁の勉めと云ふ者なり。(七四)
- ② 「各々その【本心】を得たり。」【本心】を得るとは、武王が天下を得給へども、我が心を尽くして、その時にかやうにも致したらばと(八九)
- ③ 【本心】かくのごときかと知り、尊師死後に至りて、いよいよ決定せり。ここにおいて、聖意をうすうす知り得たり。我が【本心】を決定するからは(一三〇)

結論を言えば、この6回の全てが「仁義礼智の性=本心 (=良心)」の意味で使用されたものであった。以下、これら全てに関して、その前後を含め現代語訳と共に解説してゆく。

語録における本心①

- ① 【本心】を得ば、その時こそ、主人の恩を贈るのみならず、天下国主の恩をも、一時に贈るべし。(中略) 彼が恩を思ひて、後に【本心】に立ち返らしむるやうにするは、仁の勉めと云ふ者なり。(七四)

(主人の) 恩に報いるとは、どういうことか。その金を神のように敬い尊び、失わぬようにせよ。そうすれば、家は豊かになる。志を立てれば、身の行いも自然と正しくなる。外に礼義が整えば、内の証も必ず熟する。

【本心】を得たなら、その時こそ主人の恩のみならず、天下の国主の恩をも同時に報いることになる。

孔子は言った。『正しい者を挙げ、曲がった者の中に置き、曲がった者を正しくさせる。正しい者を挙げ、曲がった者を退けるのは「知」である。曲がった者を正しくさせるのは「仁」である。』

お前が手代を選んで欠点をあらわすのは、曲がりをもそのままにすることである。その者に恩を思わせ、後に【本心】へ立ち返らせるようにするのが、仁のつとめである。

この「七四」は真面目過ぎる手代の話であり、この文は「手代がどのように主人の恩に報いるべきか」という部分である。

文中の「仁」や「知」は、仁義礼智の仁と智であろうことと、「本心を得る」「本心へ立ち返らせる」などの言い回しから、「仁義礼智の性」や「良心」と同じ意味で「本心」を使用している。

語録における本心②

② 「各々その【本心】を得たり。」【本心】を得るとは、武王が天下を得給へども、我が心を尽くして、その時にかやうにも致したらばと（八九）

孔子は言った「殷には三人の仁者があり、その行いは至誠と惻隱であった。」と。紂王の悪に対しても、惻隱の心から出て、君を真実に愛する道に背かなかった。それによって、自らの心の徳を全うしたのである。

「それぞれ自分の【本心】を得たのである。」

【本心】を得るとは、たとえ武王が天下を得たとしても、もし自分がその時、心を尽くしてこのように尽くしていたなら、あるいは王の悪事も止まったのではないかと、後になって疑い悔やむところが全く無いことである。このように尽くして、わずかも心に残るものがない。

「仁」の素となる惻隱から、「君を真実に愛する道」が全うされている。

これを「本心を得る」と解説しているため、これもまた「良心」と同じ意味で「本心」を使用しているものと考えられる。

語録における本心③

③ 【本心】かくのごときかと知り、尊師死後に至りて、いよいよ決定せり。ここにおいて、聖意をうすうす知り得たり。我が本心を【決定】するからは（一三〇）

ある士：朱子学において物事を判断し処理する際、その基礎はどのように立てるのか。その様子を聞いておくようにと、私は主人から命じられたまま、たずね申し上げる。どうかお聞かせ願いたい。

梅岩先生：最初は、学問の土台など何も立てていなかった。素読をしていた頃は、ただ漠然と聖人賢者の意味を知りたいと思っていただけである。それ以上に、学者になりたいとも思わず、まして俸禄を望む気もなかった。

しかし、自分自身を知らなければ、聖人の意味はますます分からないと気づいた。それから講義を聞くようになり、次第に「心を知る」「性を知る」と説かれるにつれて、自分の性を知らねばならないと思い、何とか知りたいと心に向けて問いただした。

そのとき、ある老儒が言った。「果実の種を割ってみれば、そこにはまた芽となる形がある。それがすなわち仁である。」

そこまで形にして丁寧に示されても、私は【仁性】というものは、そんなに簡単に分かるものではあるまいと思ひ、納得できなかったのだと、後になって悟った。

ありがたいことに尊師にお会いし、真の道を聞き、出入りして三年ほどが過ぎ、ご病気になられ、最期に至って、ようやく、これが【本心】なのかと、かすかに分かり、尊師の死後、いよいよ確信するようになった。ここにおいて、聖人の真意をうっすらと知ることができた。

自分の【本心】を定めれば、すぐに道は行われ、下り坂で車を押すように、力を入れずにできるものだと思っていたが、実際には、行うことの難しさは、天に梯子をかけて登るようなものだと思う。

もし、心安く行えるという人がいるなら、それは現代の孔子であろう。それほどに、行いは難しく、苦しいものだと、私は決めている。

この文においては、「本心」＝「仁性」であろう。

この文に現れる「本心」を、そのまま「性」と置き換えても、梅岩の言葉として何らの違和感もない。

心學道話全集における本心

心學道話全集とは何か

手島堵庵が、性を「本心」と変えて世に広めたことは有名である。「石門心学」という言葉自体も、梅岩の時代になく、当時「心学」と呼ばれた陽明学との混交を避けるために、手島堵庵の時代に命名されたものである。

手島堵庵は、性を「本心」と呼ばせるよう徹底したようだ。これは「心學道話全集」を紐解くことで、それが明確にわかる。

この心學道話全集は、「忠誠堂」によって昭和初期に発行されたものであり、全6巻に渡る。

忠誠堂の主人・高倉嘉夫が編集し、加藤咄堂が監修した書である。

高倉嘉夫は、6巻全ての冒頭において、以下のように述べている。

心學道話の創始は、今を去ること約二百年に在つて、石田梅巖を開祖とする。二世手島堵庵、三世中澤道二を経て、その學海内に廣まつた。柴田鳩翁、脇坂義堂、奥田頼杖、布施松翁などは、心學中の錚々たるものだ。

その説、要は【本心を知れ。】といふに在る。五倫、五常、一切の道德を挙げて、悉く無我の本心に歸着せしめ、これを證するのに、忠臣孝子、節婦忠僕の事蹟を以てし、時に落語的笑語を引用して、聽者の了解に便な

らしめてあるところは、神、儒、佛、老を打つて一丸とした一大平民的道德教と見てよい。

この文1つを見てもわかるように、心學道話全集の中核は「本心を知れ」にある。

梅岩が「性を知れ」と言ったように、手島堵庵以降の弟子たちは「本心を知れ」と言ってきたのである。

心學道話全集における本心

心學道話全集には、石門心学門下の多くの弟子たちの文と共に、梅岩自身の「都鄙問答」と「儉約齊家論」の梅岩二書も収められているが、あくまで手島堵庵以降の弟子たちの捉え方を明確にするため、梅岩二書を除いて、これを研究した。

心學道話全集において、「本心」はなんと 577 回も使用されていた。

これに対して「良心」は、わずかに 2 回だけである。

梅岩二書では 0 回であり、石田先生語録においても、わずか 16 回しか使用されていない。

心學道話全集の文字数が膨大であるにしても、577 回は圧倒的に数多い。

すでに、『手島堵庵が、性を「本心」と変えて世に広めたことは有名である。』と述べたが、これが明確にわかる部分のみを、以下に抜き出す。

續々鳩翁道話「一 天の命」

扱之を性と謂ふと、本文にござりまするは、之とは、上にいふ天の命をさして申し、性とは、人のうまれつきの心と申す事じや。則ち元亨利貞の天理をうけて性となる。かるがゆゑに、朱分公は、『性は理なり。』と仰せられまして、則ち本心の事でござります。此本心は、天理を其ままうけましたるゆゑ、仁義禮智心の徳そなへます。この仁義禮智が、則ち天の元亨利貞じや。

續々鳩翁道話「二 道と教と」

さるに依つて、『人の性は善也。』と古人も仰せられました。此性にしたがひますれば、することなす事、皆人の道がかなひまする。故に『性にしたがふ、これを道といふ。』と申してござります。道とは、自由自在の出來るといふ名じや。無理すると自由自在は出來ぬ。無理のない本心にしたがえば、自由自在で、安樂にござります。これを道と申しまする。されば性と道と、別のものではござりませぬ。

賣ト先生糠俵（ばいとせんせい んかだわら）虚白齋著「八 失せもの」

汝も其失ひし金を尋ねんより、先づその失ひし本を尋ね見るべし。唐土に二人羊を牧ふ者あり。其一人は書に見入りて羊を失ひ、又一人は博奕して羊を失ふ。其所作は異なれども、羊を失ふに至りては一つなり。其羊を失ふは、まづ本心を失へばなり。書物も書物の見やうによつて、其本心を見失ふ。況や博奕、名聞、利欲、色欲においてをや。可恐々。』

奥田壽太講話・心學道の話 四編「一 本心の道」

人も、やつぱり、そのとほりて、むかしの人でも、今の人でも、男でも、女でも、仁義禮智、孝弟忠信、これが、人々のうまれつきた、本心の道じや。なんにも、當世はやる、孝弟忠信や、むかしの聖人が製作へて、御

をしへなさる、仁義禮智のみちではない。さるによつて、當門では、まづ、この本心を知る事を、御すすめ申します。本心しらぬと、みちは、聖人の製作へものやうに、おもふ。それが、大きなまちがひじや。

奥田壽太講話・心學道の話 三編前席「一 死にともない」

此仁と申すは、御たがひに、母の胎内へ、一滴のつゆと、やどるやいな、即に、天より賊與られた、本心の異名で、ござります。さらによつて、中庸には、『仁は人也。』の、孟子には、『仁は人の心也。』のと、申してござります。爰には、朱子が、『本心の全徳。』と、註をなされました。

なお、最後の「朱子が、『本心の全徳。』と、註をなされました」は明らかに間違いである。

問題の箇所は、『孟子』「尽心上」の『惻隱之心，仁之端也。羞惡之心，義之端也。辭讓之心，禮之端也。是非之心，智之端也。』に対する朱子注である。朱子はここで、「此心皆良心之全徳也。」と注している。

(ChatGPT)

朱子の良心と陽明の本心

朱子学と陽明学において、本心と良心の使用を ChatGPT に問い、確認した。

その結果は、驚くほど真逆の結果であり、

- ① 朱子学では、良心を多用するが、本心を使用しない。
- ② 陽明学では、本心を多用するが、良心を使用しない。

陽明学は、朱子学の否定から始まった学問でもある。

陽明は、朱子が多用した「良心」を使用したくなかったのかもしれない。

以降、朱子における良心と陽明における本心を掲げる。

言葉は異なるものの、極めてその使用において似通っている。

朱子における良心

『朱子語類』

良心者，天理之正也。(良心とは、天理の正しきものなり。)

人但當存養此良心。(人はただ、この良心を存養すべきである。)

良心常在，私欲蔽之。(良心は常に在るが、私欲がこれを覆う。)

良心若明，則百行皆正。(良心が明らかであれば、あらゆる行いは正しくなる。)

良心本自光明。(良心はもとより光明である。)

『孟子集注』尽心上

此心皆良心之全徳也。(この四つの心は、いずれも良心の全徳である。)

『四書集注』中庸章句

良心者，人心之正理也。(良心とは、人心における正しき理である。)

『近思録』

良心，天理也。(良心とは、天理である。)

『修養論関係』

存此良心而不失，則天理常存。(この良心を保って失わなければ、天理は常に在る。)

良心為主，而氣質從之。(良心を主とし、氣質はこれに従う。)

陽明における本心

王陽明・『伝習録』

人但失其本心，便失其天理。(人はただその本心を失えば、すなわちその天理を失う。)

良知即是本心。(良知とは、すなわち本心である。)

本心本無不善。(本心はもとより不善というものがない。)

只為私欲蔽了本心。(ただ私欲が本心を覆ってしまっただけである。)

本心體同天地。(本心の本体は、天地と同じである。)

只要復得本心。(ただ本心を取り戻せばよい。)

見得本心，便是見得天理。(本心を見得すれば、すなわち天理を見得する。見得=見て理を得ること)

本心若明，萬善皆具。(本心が明らかであれば、あらゆる善が具わる。)

復此本心，則是聖人。(この本心を回復すれば、すなわち聖人である。)

『王文成公全書』書簡

此心即是本心。(この心こそが本心である。)

本心常存，不假外求。(本心は常に存し、外に求むるを要しない。)